

外国書講読に期待できそうなこと

三 古 展 弘

1. はじめに

ここで述べる「外国書講読に期待できそうなこと」と題する文章は、経営学部の必修科目として開講されている「外国書講読」を受講することによって、受講生の皆さんがどのような成果を得ることが期待できそうか、ということについて私なりの考えを述べるものです。つまり、受講生の皆さんに、外国書講読を受講する際に、ただ単位取得のみを目的に漠然と受講するのではなく、どのような成果を得ることが期待できそうか、を意識してもらうことを意図しています。私の文章を読んでいただき、「このような成果が得られるようにこの方法を試してみよう」とか「もっと別の成果が得られるように違う方法を考えよう」という、外国書講読への取り組み方を考えるきっかけとして読んでいただければ結構です。そのため、この文章は、前半で外国書講読に期待できそうなことについて私なりに考えるいくつかの点に触れ、後半で、私の講義で取り扱う外国書講読のテーマについて若干の説明を加える、という形式を取りたいと思います。

しかし、本題に入る前に、この文章では私の個人的な考えについて述べるものですから、私のバックグラウンドについて簡単に説明する必要があるでしょう。私は、名古屋大学工学部土木工学科で学士（工学）を取得後、名古屋大学大学院工学研究科で修士（工学）を取得（この間に、交換留学によりフランス国立ポンゼシヨセ工科大学のMBAも取得しました。ただし、フランスでの講義は総て英語で行われました。また、留学中はオランダで4ヶ月ほどのインターンシップを行う機会にも恵まれました）、さらに名古屋大学大学院環境学研究

科で博士（工学）を取得しました。神戸大学には博士号取得直後の2005年の4月に着任し、交通計画、交通行動分析に関する研究を行っています。ですから、この本が皆さんのお手元に届くころには、着任後、丸1年が経っていることとなります。なお、外国書講読という名前の講義は、私自身は学部時代に受講したことはありません。しかし、大学院に入ってから、「輪講」と呼ばれる講義で専門書を英語で読んだことがあります。名古屋大学の土木工学科では約8割以上の学生が大学院へ進学していましたので、学部で外国書講読を行う必要はなかったのかもしれませんが、なお、この文章では外国書として英書を想定しています。

2. 外国書講読に期待できそうなこと

(1) 専門書を外国語で読むということ

経営学部の多くの学生にとって、英語は大学受験において必要な科目であったと思います。中には、英語が得意であった人もいるでしょうし、苦手であった人もいます（実際、私も英語にはかなり苦労させられました）。しかし、その中で実際に外国書を1冊通読したことがある人はどのくらいいるでしょうか。特に、専門書を英語で読んだことがある人はどのくらいいるでしょうか。今後、大学を卒業後、皆さんが社会へ出てからは、（職業によって違いはあるでしょうが）外国人と接する機会や英語を使う機会が増える場合も多いと予想されます。英語でメールを書いたり、議論をしたり、報告書を書く必要があるかもしれません。また、英語の文献や資料、説明書を理解しなければならないかもしれません。そのようなときに利用する書物は、あなたの仕事に関連する専門的な書物ということになるのではないのでしょうか。就職してからの専門分野と外国書講読での専門分野は必ずしも一致しないかもしれません。しかし、専門的な外国書を読むということはどういうことか、を外国書講読の講義を通じて知っておくことは、その後同じような境遇に接したとき、とても役

立つと思います。

少し話はそれますが、特に、外国への留学を検討している人や研究者を目指している人にお勧めしたいのは、何かの専門科目を勉強するとき、よい英語の専門書があれば、日本語の専門書ではなく、英語の専門書を選んで勉強することです。もし、その専門書の訳本が出ていれば、それと対照しながら勉強するのも良いでしょう。私も、実際にこの方法を試してみたことがあります。多くの専門用語を自然に覚えたので、その後、英語の論文を読むときに大いに役立ちました。

(2) 他人の前で発表し、議論するということ

これは、講義によって違うと思いますが、私の講義では、1冊の本を担当者に割り振り、毎週担当者がそれを発表する、という形式を取っています。そのときに、基本的には全訳をしてもらうわけですが、単に全訳した内容を朗読するのではなく、それを整理して発表してもらうようにしています。つまり正しい内容を発表することに加え、これを分かりやすく発表することが求められるわけです。外国書講読には発表の時間的制約はさほどありませんが、実社会では、限られた時間の中で分かりやすく重要な点のみを説明する能力が要求されます。このような点に意識すると、自分の担当の週には、いかに分かりやすく発表するか、に苦心するでしょうし、他の人の発表を見ることでどのような発表が分かりやすく、どのような発表が分かりにくいのか、ということも理解できるでしょう。場合によっては、他の受講生に自分の発表が分かりやすかったかどうかの感想を聞いてみるのもよいでしょう。

よく観察すれば分かるのですが、発表の分かりやすさ、というものは人によって驚くほど違うものです。同じ文献の同じページの内容を何人かの人に発表してもらった場合（例えば、それが日本語で書かれた内容であっても）、とても分かりやすく発表できる人もいれば、どうしたらこんなに分かりにくく発表できるのか、という場合まで様々な結果になるでしょう。このようなことは、実際

に講義で体験してみなければ分からないことです。

また、私の講義では発表者に対し質問することを奨励しています。そのため、昨年度は、発表の担当者を割り振るのと同様に、質問の担当者も割り振りました。つまり、質問の担当になった週には、必ず発表者に対して質問をしなければならない、というルールを決めたのです。実際に、質問をしてもらおうと、かなりいい質問をしてくれることも多いですし、質問がなければそのまま進んでしまうところでも、立ち止まって考えることができます。常にいい質問をすることは誰にとっても簡単なことではありません。しかし、自ら質問し、議論に参加することは、実社会ではとても重要なことだと思います。是非、質問をするということにも慣れてもらいたいと思います。

(3) 英語能力の向上

これは、学生の皆さんが最も期待することの1つではないでしょうか。外国書講読を受講することによって、英語の能力が飛躍的に向上するならば、受講生にとってもとても幸せなことだと思います。しかし、これまで英語を専門としている先生に中学校・高校と英語を指導してもらっているにも関わらず、英語を自由に読みこなせる人は少ないのではないのでしょうか。ですから、外国書講読を半年受講することで、英語の能力を飛躍的に向上させることは簡単ではないかもしれません。しかし、外国書を1冊読むというせっかくの機会ですので、英語能力の向上に役立つと考えられることについて、私の体験談も含めていくつか紹介したいと思います。

まずは、予習をすることです。自分の担当の週の予習をすることはもちろんですが、それ以外の週でも予習をすることをお勧めします。通学の行き帰りの電車の中で1回通読し、余裕があれば分からない単語を調べる、というような無理のない範囲から始めてもらって結構です。そのときに、どのようなところが分かって、どのようなところが分かりにくかったのか、をチェックしておくだけでも講義中に得るものはかなり違うと思います。外国書講読で読むのは専

門書ですから、普通の辞書ではかなり下のほうに載っているような専門用語が多く登場することもあります。事前に読んだときに全く意味の通じなかった文章が、専門用語を知ることによって、理解できるようになることはよくあることです。このようなときは、その専門用語を覚えればいいわけです。また、1冊の本を分担して発表する場合には、なかなか自分の担当する数ページを読んだだけで、筆者が意図する内容を理解することは難しいと思います。自分の担当以外の部分も一読しておくことは、自分の発表のときにも役立つことが分かるでしょう。

もう1つ、私が行っていた些細な工夫は、英単語を調べるときに、日本語訳を書き写すと同時に、発音記号も同時に書き写し、実際に発音してみることで、これは、一見手間がかかるように思えますが、私にとってはかなり役立ちました。この方法を使っていたからかどうかわかりませんが、英語の発音のルールに知らないうちに慣れてきたような気がします。そのため、発音が分からないために、英語の勉強が苦になる、という経験はかなり少なかったと思います。

3. *Megaprojects and Risk* を読む

(1) *Megaprojects and Risk* の内容

それでは、そろそろ私の担当する講義で読む外国書 *Megaprojects and Risk* (Flyvbjerg *et al.*, 2003) の内容の説明に移りたいと思います。本書でいう *Megaprojects* とは、英仏海峡トンネルや明石海峡大橋などの巨大プロジェクトであり、主に、巨大交通プロジェクトを扱います。

本書の特徴の1つは、実際に多くの巨大交通プロジェクトの実例が登場し、その紹介の過程でいかにプロジェクトが当初計画どおりに進むことが稀であるか、ということを実感してもらえらる点にあると思います。

分かりやすい例として、建設費用と交通需要の予測について考えてみましょう。例えば、あるプロジェクトでは当初の建設費用を X ドルと予測していた

にも関わらず、実際に建設を行ったらYドル($X < Y$)かかったときは、建設費用の推計が過小であった、ということが分かります。そして、本書ではその原因についてさらに詳しい説明が続きます。同様に、あるプロジェクトでは当初は交通需要を1日あたりZ人と予測していたにも関わらず、実際に完成したら1日あたりW人($Z > W$)であるときは、交通需要の推計が過大であった、ということが分かります。そして、本書ではその原因についてさらに詳しい説明が続きます。この文献では、いくつかのヨーロッパの巨大交通プロジェクトの紹介に加え、各国の事例についても多数のデータを紹介していますので、果たして20%の過大な需要予測は全体の中では当たっているほうなのか、外れているほうなのか、というようなことも理解できると思います。

また、巨大交通プロジェクトが当初計画どおりに進まない原因について考察した結果から、従来のプロジェクトの計画法は適切ではないと考え、それにかわる別の巨大プロジェクトの計画法の検討を行います。また、本書では、目次を見ただけでも、environmental impact (環境影響), privatisation (民営化), accountability (説明責任)などもキーワードとして登場し、巨大交通プロジェクトを広い視点から理解しようとしていることも特徴として挙げられると思います。

なお、今回取り扱うプロジェクトは主に交通プロジェクトですが、本書での考えは交通以外のプロジェクトにも適用できると考えますので、交通以外のプロジェクトに興味のある学生にも役立つと思います。また、本講義の内容の一部は、学部の『企業政府関係』と重複するものとなるでしょう。

(2) 講義の進め方

2.でも述べたように、私は外国書講読では、出席をし、実際に講義に参加することによって得られるものがかなり多いと考えています。講義に出席しなければ、他人の発表を見たり、質問をしたりして学ぶことが出来ないからです。そのため、昨年度は、3回以上の理由のない欠席は不可というルールを決めて

いました。本年度も同様のルールを適用したいと考えています。

講義は、あらかじめ決められた発表者による発表とあらかじめ決められた質問者による質問、私からのコメント、を中心にして進めていきたいと思います。発表にも質問にも当たっていない人も出てきますが、その人たちにも適宜発言を求めるようにし、できるだけ全員が講義に参加できるような体制を作ることにも検討したいと思います。

(3) 講義の改善について

私は2005年3月までは学生であったのが、2005年4月からは教員という立場に変わりました。そのときに思ったのは、私自身が受けて「良かった」と思った講義の内容をベースにして、できればそれを改善しよう、ということでした。また、神戸へ来てからも、何人かの先生方に講義の進め方について相談をしました。その過程で知ることができたのが、どの先生も有益な講義を提供したいと欲しているのと同時に、どの先生も講義をより良くするための改善策を探る姿勢をお持ちであることでした。ですから、私は講義の方法に関する建設的な改善案は歓迎したいと思います。昨年の講義の時には、講義の半分くらいが終わった時期にアンケートを実施し、講義に関するいくつかの要望を書いてもらいました。もちろん総ての要望に応えることは不可能でしたが、いくつかの要望には応えることができたと思っています。

4. おわりに

もちろん、ここで述べた内容は私自身の経験と想像に基づくものであり、これ以外にもよい方法はたくさんあるでしょう。外国書講読は卒業のための必修科目です。外国書講読の単位を確実に取得することが皆さんにとって最も重要なことでしょう。しかし、かなりの労力を要する外国書講読の講義において、単位以外に得るものが全く無いのでは寂しいものです。皆さんが興味を持った

専門分野に関する外国書を読む機会として外国書講読を利用し、実りある成果をあげていただきたいと思います。

最後に、本稿は、私の外国書講読という講義に対する個人的な考えを述べることが中心となったため、まとまりのない偏った文章になったことをお詫びいたします。最後までお読みいただいた読者の皆様には感謝するとともに、この文章が、外国書講読を受講する皆さんにとって、少しでも参考になるものとなれば幸いです。

参考文献

Flyvbjerg, B., Bruzelius, N. and Rothengatter, W., *Megaprojects and Risk: An Anatomy of Ambition*, Cambridge University Press, 2003.